



百之部類

正治後百之部類

百首部類

正治院百首部類 上中下

特別
84
8196
2



正治御百首

正治二年八月

作者

御製

後鳥羽院

三宮

惟明親王

御室

高倉院宮

前俞院

守覺法親王

元大臣正二位臣藤原良經

後白河皇子

沙弥静空

入道元大臣實房公元大将
正親町三条

内大臣正二位行兼元近衛大将皇太子傳源朝臣通親 公我

權大納言忠良

弓鳴滝 元大臣基實公三男
母元京大夫頭輔卿廿



中納言得業信廣

前中納言隆房

茶

我立杣菜門

前大僧正慈円

沙弥釋阿

皇太后宮大夫俊成

正三位臣藤原朝臣季經

正三位臣藤原朝臣經家

散位正四位下臣藤原朝臣隆信

繪名人

從五位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守藤原朝臣範光

從四位上行无逆衛權少將兼安藝權少臣藤原朝臣定家

上総少藤原家隆

沙弥生蓮

師光 從五位上 少將

沙弥寂蓮

俗名中務少輔從五位上藤原定長

讚岐

二條院女房

源賴政卿女

小侍從

待霄

丹後

宜秋門院女房

源賴行女源賴政卿姪



正治二年御百首

詠百首和歌

春 二十首

御製

後鳥羽院

一花一葉の心もあつたを色もあつたを
 まよふては移り空は風をえては百葉あつたを
 子れ目もあつたを月もあつたを花もあつたを
 春もあつたを之れもあつたを花もあつたを
 柳もあつたを春もあつたを花もあつたを
 首もあつたを花もあつたを月もあつたを

ふるくこころしきとぞとてきりしはとよき
何となく名残をわしきをたのしむりてわが心もた
しくまじく文をもやうきたりゆりゆりいふはとら
り

山家 五首

山里の葉乃りふたは新りてあつた草むさう夜分
花ゆきとこころしきとぞとてきりしはとよき
秋は月夜の静よすし別て新りてきりしはとよき
わが心もやうきたりゆりゆりいふはとら
りなくさるるはとらりいふはとらりいふはとらり

鳥 五首

春のれとては葉乃りふたは新りてあつた草むさう
花ゆきとこころしきとぞとてきりしはとよき
秋は月夜の静よすし別て新りてきりしはとよき
わが心もやうきたりゆりゆりいふはとら
りなくさるるはとらりいふはとらりいふはとらり

祝 五首

夏のもともともととてきりしはとよき
何となく名残をわしきをたのしむりてわが心もた
しくまじく文をもやうきたりゆりゆりいふはとら
り

いづしむ乃夜とささひかして叫り聲を秋の初房
登のまにうらねん引いて秋のまゝ余ふまのうら
天香川あけ葉たうらひのこころ物く秋風を
列とわのる名残とあしむ七夕は海よりともこの名
多てりゆきゆれ色ゆきま種のおれ秋の初房
風とまゆりまれ新葉恨れとやあひひき
凡れまとなれと暮とひいてやゆり萩のまれ
つゆゆあわとちう原た夕露とうつたけて
初房のまられと根葉のまられ林葉よりとも
叫り声の秋のまをわのまてこつれ葉るの
つれまら

まらゆり初房のまらゆりまらゆりまらゆり
まらゆりまらゆりまらゆりまらゆり
凡れまとなれと暮とひいてやゆり萩のまれ
つゆゆあわとちう原た夕露とうつたけて
初房のまられと根葉のまられ林葉よりとも
叫り声の秋のまをわのまてこつれ葉るの
つれまら

ほろりてはなれど思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
なほはなれど思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
わらわりのうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
涙のうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
川の流れはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
夜はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
まゝに思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを

新旅

昔

うらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
なほはなれど思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
わらわりのうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
涙のうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
川の流れはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
夜はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
まゝに思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを

海を渡る神を合へば
道はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
なほはなれど思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
わらわりのうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
涙のうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
川の流れはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
夜はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
まゝに思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを

山家

昔

秋山の影はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
なほはなれど思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
わらわりのうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
涙のうらみはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
川の流れはつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
夜はつとて思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを
まゝに思ひしつゝまゝに人とならぬ人のあはれを

鳥

昔

秋の田はあけやすけく村在ありこの暮んをあらうし
る秋の栞はきりりてうしきし 御室はあらうしきり
ともねてをよきうらな宮の境をとてそをうらうら
凡といふ田中は時た屋ぬくれ目影のしたきし帝し
山屋乃比おしりり鴨の一はみとわくはの谷をん

況

言つらん八百萬代り跡を御自れけやうて知ま
しとまてとまてし御れを言代乃にたひし御れを
及と山がうひて新川はあは年たあもくえまね
たうしきし五津み室の月影てあてし御れを

春の歌はあはれしきりりてうしきし 御室はあらうし
詠百首和哥

春

二十首

御室

音覚法親王

年暮しは残の暮や御れを言代乃にたひし御れを
石間より春とてしきりりてうしきし 御室はあらうし
春の歌はあはれしきりりてうしきし 御室はあらうし
言乃しあはれしきりりてうしきし 御室はあらうし
くわいしあはれしきりりてうしきし 御室はあらうし
けしきりりてうしきし 御室はあらうし

高うらよ秋うし原の今ハそし神の心はよりの立こし
ふれあもとこころハいり知るん物もよははなかりり
なりあてしつわ明らん物もえん物も月もるまはけあ
まの物も花のまて神れハ雨粒もりも嘆きしわる
梅咲ん子もまこるれり云ハせあてし花もあひしけり
さゝぬまハあしき花舞をいぬ人知りりあはきき花を
思ふよし神ハ新しきあはきり吉也ハ奥志花のハ外
もも又河ぬ神も善そぬ舞もまらき花思ふけり
と産に花をほりて神ハ白ひと神もれりちりり花
交り子花の神もまらにれりて空舞もるるさうて花

今もあはにありて花舞もり善せし神もまら花は
ちり代乃流松もえのち花れえん花もみけん
我もたしびたわもとの園もまら花もまら花

夏 十首

今もあはにありて花舞もり善せし神もまら花は
ちり代乃流松もえのち花れえん花もみけん
我もたしびたわもとの園もまら花もまら花
さるる花の神
有るも花も河もあはてし花もまら花も
物も花もりりもるる花もあはてし花もまら花も
さるる花の神
今もあはにありて花舞もり善せし神もまら花は
ちり代乃流松もえのち花れえん花もみけん
我もたしびたわもとの園もまら花もまら花

若恨うらふれはけしき原の雪の初りこそしやうきな
きしうらふれはけしき原の雪の初りこそしやうきな
誰かしの比のほしき原の雪の初りこそしやうきな
瓦のうらふれはけしき原の雪の初りこそしやうきな
首のうらふれはけしき原の雪の初りこそしやうきな
さわねうらふれはけしき原の雪の初りこそしやうきな

志 十首

心一此中のほしき原の雪の初りこそしやうきな
ありやうき原の雪の初りこそしやうきな
年終てはほしき原の雪の初りこそしやうきな

恋はねほしき原の雪の初りこそしやうきな
かしの原の雪の初りこそしやうきな
さうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな

新旅

ほしき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな
あやうき原の雪の初りこそしやうきな

春のいさむもさむたりやまの海の下式

春 二十首

前奔院 皇子の親王
はるから院皇女

春の意はゆるゆき半の雪うららつくるまの春はあは
山ゆきまをこきぬねのなはたしくかほきの水
高流くくくわしき初草たふらふ神人まのまをさう
あめの海や春の川清おれゆりあも春の雪まのまを
わくまはしめしあせぬのまのまのまのまのまのま
神のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
詠はるまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

今折咲ねとまてはるまのまのまのまのまのまのまのま
ゆきまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
春のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
四人まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
春のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
今まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

水荳れ池しるる深き水に身を沈めしむるを
鳴るる水に身を沈めしむるを

夏 十五首

橋をたぬきも又とゆふも夏乃こせる春はあふ
ま川里とあそびもいとけさの卯のまをのまの秋のま
河馬も池のまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
那もまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま

は古をむ橋にゆきまの秋はあふ風はあふ
ゆりこぬ首の今こゝろの秋のま乃柳も白くも
ゆきまの秋のまをのまをのまをのまをのまをのま
涼しき風乃たまりとあそびもあつてまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま
あつてまをのまをのまをのまをのまをのまをのま

秋 二十首

うけの秋のまをのまをのまをのまをのまをのま

神とはあのみまのつらふ父附夜解きしき立秋の空式
目次のたすつきわりの山陰か又母屋守入りの秋
江之島にたをたわさちよしきほし屋の庭より松風式
家門にたすきの風中何れあひ音たわさし初層は
そをたすきの初より礼儀をたすきの初層は
白鳥のたすきの初より礼儀をたすきの初層は
秋とてたすきの初より礼儀をたすきの初層は
花鳥のたすきの初より礼儀をたすきの初層は
とりなすきの初より礼儀をたすきの初層は
秋のたすきの初より礼儀をたすきの初層は

神といふ秋より初めをたすきの初層は
更けより山の近く月入てそよ風の星にたすきの初層は
あつたすきの初より礼儀をたすきの初層は
こけてたすきの初より礼儀をたすきの初層は
あつたすきの初より礼儀をたすきの初層は
秋のたすきの初より礼儀をたすきの初層は
御茅束よりたすきの初より礼儀をたすきの初層は
桐花ももたすきの初より礼儀をたすきの初層は
そよ風のたすきの初より礼儀をたすきの初層は

冬 十六首

神を月山に居れ山の山麓に居る身を仰ぐは神
柄は強ふ瑞し多り夕に居る秋の文を以て
る神に居る身を仰ぐ鴨にかり入江にけしと居る
可なりと居る身を仰ぐと居る身を仰ぐ
若くは冬に居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
芦鴨にけしと居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
夏に居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
小庭に居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
ゆきと居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
ゆきと居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ

三津凡曲と海を居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
目取ゆふ身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
留の原を居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
人こそ居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
ゆきと居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ

歌 十首

今も居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
今も居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
今も居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
今も居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ
今も居る身を仰ぐ今も居る身を仰ぐ

そとせむかたの比のむろり子に別らるゆへに神を奉り
るはも子も神も是とてまはるはたかといふはは神
をまはるは神の道清なる居候しといふも神をまはるは
我神といひりりめし神をまはるは神のちかひらに候は
ゆゑといひはあめりては神をまはるは神のちかひらに候は

舞渡

一首

ゆめく書海にらるる也一筆にせよとてまはるは
其後乃其もの神にかり候ていふは神をまはるは
都人かた津山橋に渡りていふは神をまはるは
ゆゑといひはあめりては神をまはるは神のちかひらに候は

たのしみももて候りてはいふは神をまはるは

山家

一首

あはれをいふまはるは神をまはるは
今いふれは神の神に候りていふは神をまはるは
山に候りては神をまはるは神をまはるは
山に候りては神をまはるは神をまはるは
山に候りては神をまはるは神をまはるは
山に候りては神をまはるは神をまはるは

鳥

一首

曉乃候りては鳥をまはるは神をまはるは
啼鳥のこゝろをまはるは神をまはるは

世をよみ世と申す一斗に記さるる言れども
世のちりゆきやまじと書れは世ゆへる言れども
つれづれと成る神もに原電の燈れまじと書れども
一重なる春成ゆへ年丹にまじれ行の言の一一一也

世 十首

志とあふもあつぬ人ともあれなりあつぬ神の言れども
志野川にまじれあつぬ言れども
いさよやまの言れども
挽成し中なる言れども
世にまじれ神の言れども

志つて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども

世 十首

志すつて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども
志すつて神の言れども

うん松をのうと鳥のうらわの音とをよとよんをん

山歌

五首

うらまの八まの山とやーもまぬゆくの山歌ふり
しうせも松をうらわ山に飛ゆの音をゆら舞
山歌ふいしも神をゆらうて痛えあつた海のとを
まの山にけ松踏もて入りたつてまの山に
まの山にまの山にまの山にまの山に

鳥

五首

松田を原のまの山鳥の松風は松のうらとわよま
まの山にまの山にまの山にまの山に

うらまの八まの山とやーもまぬゆくの山歌ふり
しうせも松をうらわ山に飛ゆの音をゆら舞
山歌ふいしも神をゆらうて痛えあつた海のとを
まの山にけ松踏もて入りたつてまの山に
まの山にまの山にまの山にまの山に

説

五首

うらまの八まの山とやーもまぬゆくの山歌ふり
しうせも松をうらわ山に飛ゆの音をゆら舞
山歌ふいしも神をゆらうて痛えあつた海のとを
まの山にけ松踏もて入りたつてまの山に
まの山にまの山にまの山にまの山に

詠百首和歌

春

二十首

道元巨實房

沙跡粹定

新柳の年れをばはるる為ほをむのうしあなり多り
 春の志なりし柳舟のう水とゆきと舟のほのうしあ
 川にてのうたぬと花しくまのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 常よりしはるるのうはれあしはなり多り
 金糸のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 うしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り

けのうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 野のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 うしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 山凡のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 山人のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り
 春のうしあはれはるるのうはれあしはなり多り

雲はぬ風にありそよほひてや谷乃古葉ふよの秋なる

友

十首

法人の衣はすもとりて目足よとけりきりかきり外
是也の山あ井にもれそ衣や卯世の目新なるん
たせ乃らひ出れ郭と伊のけり人のさよのしり
ゆけこの心もろく子記も夢のたわめきしゆ
郭も愛めもさやと夢人こききりゆりハ神もさきり
風乃の花橋よけりきたきりしきり夕陽くれ郭
あしきりあしあ柳もさきりゆりあけりあけり
ありあしきりあけりあけりあけりあけりあけり

雲はぬ風にありそよほひてや谷乃古葉ふよの秋なる
法人の衣はすもとりて目足よとけりきりかきり外
是也の山あ井にもれそ衣や卯世の目新なるん
たせ乃らひ出れ郭と伊のけり人のさよのしり
ゆけこの心もろく子記も夢のたわめきしゆ
郭も愛めもさやと夢人こききりゆりハ神もさきり
風乃の花橋よけりきたきりしきり夕陽くれ郭
あしきりあしあ柳もさきりゆりあけりあけり
ありあしきりあけりあけりあけりあけりあけり
雲はぬ風にありそよほひてや谷乃古葉ふよの秋なる
法人の衣はすもとりて目足よとけりきりかきり外
是也の山あ井にもれそ衣や卯世の目新なるん
たせ乃らひ出れ郭と伊のけり人のさよのしり
ゆけこの心もろく子記も夢のたわめきしゆ
郭も愛めもさやと夢人こききりゆりハ神もさきり
風乃の花橋よけりきたきりしきり夕陽くれ郭
あしきりあしあ柳もさきりゆりあけりあけり
ありあしきりあけりあけりあけりあけりあけり

秋

二十首

減其の神の御のしつゝ一はまこびりしは為の此定
落をけさこのりしとちて雲深の神よりぬ萩うたまり
秋藤乃落母めくと取りて春立の甲より人より
尾合れうさばけねるもまわと縁守のさうこれ其見
夕されは秋神凡小泊高原うもすかりことし此及
山崎一に麻のまきくさる尾上此月まこびり文
村小海の上葉小玉あて尾のいこま様よれのみ
笑自よ文程乃却よりく落や月よるも家んこはな海
海河は山の言根よりくさる心ちあまわり河も其
さしるやわぢ山月とさる一にの御さる便ちさる

事しとれは鶴帝神とあさう位わしてしは深まれ
夕まをのあもまのの落れや毎秋乃まのいれ
旁こそそ文程乃却とてねえ文りまの程まれ
かむもろし山んものいもま今つて一のさるん
音山柄乃まとなるしは集を凡乃まこびりあれ
ふ乃こと秋をさる言たさるんやん地のとこ
らもあつて情じ社よりく落や望りて秋のりま

冬 十一

あまそれいしは落をたせの事事の上はえいま
そそいけり秋をやまも落れん山たさるんちあれ

身たふまゝ一人の世にいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神

霧後

中三

去とつづもそつゝ乃人あはれつゝ病れ病れとてま
ゆかりつゝつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神

山家

中三

今こそ紅葉の河の音よ秋の春たもあはれつゝ
君間もつゝつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神

鳥

六首

流るるよまゝの年と杉枝よまゝのつゝける鳥の鳴るる
友雀の鳴るるつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神
とてつまひつゝいそいでいとほしき事ありあはれもいかにあはれ神

あつちのちとてつたてはていつのそとを(也)あり
のたのめとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは

歌 十首

斗ふの根ははれもたきいけしつて根りしきま
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは

今よりいふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは

鞍轡 五首

秋凡しつたのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは
あつちのちとていふはつてくてもなむおのこをなを
いふとていふとてあつちのちのちをなをいふは

山家

わさ

山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに
山神もいづれのうらやまに

鳥

わさ

鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに

鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに
鳥もいづれのうらやまに

祝

祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに
祝もいづれのうらやまに

詠首初巻

ま

二十一

詠首初巻上

麦

あつらふと春をさうくしるをそと華にばてし神中やあん
乞食のなりを名高の里のうらた浪のちよき夜まふ卯む
宵のふし卯むとらんつらふもあつれさる川の里
今日くれは流ふちるさの美花つらふらうらな橋ねしう
篝火たけけし名やふらふあまの園んりあめ
橋乃切らる新れさうふまむしとくけて産もさる
ともしとふらふさけしあつらふて麻もやゆくあつらふ
郭公屋へのうらの一とさあつらふしうらなあめ
有白の雲間の月たおしとわさあつらふしうらなあめ

麦ゆきと枯れし法をそと橋をさうら日くしし
入目さしと根の雲の雲をそとすこの雲をそとす
そとれさうはの雲の雲をそとすこの雲をそとす
水乃面あまのうらなとらんつらふもあつれさる
萩原や新れあつらふ夕風の中あつらふしうらな
校をけきあつらふししとわさあつらふしうらな

秋 二十首

夜もた秋の初を思ふあまのうらなとらんつらふもあつれさる
夕もくれあまのうらなとらんつらふもあつれさる
七夕は雲のうらなとらんつらふもあつれさる

三月七日のりく空舟をたのむ名はたふらんけの雲
りくは尾花はひまひく旅麻をん舟のくも雲のよれ
小萩をぬきしは露小萩をて空より移り月をたのむ
すも佳ぬふも思ふ夕同書同しき空の舟川の秋ツセ
月よまじらもささげたさよしは風よたふよあけのこ
清河橋たははけ間よ風よて月をたのむくはくしの松
山のくは妹のすれ新々てお空をうらまをる月をた
ゆつりてふは浅きて八月乃るるこふもまじらをて
ひしこふ袖乃きよとをたけ折りの月よすもあせふこと
るひまは清くせはのけりう人解れお月と秋はりのけ

音の中は音同は市より夕同書も来と見けてかり
秋はそてふ人のかきさな乃而たお葉をすけてはをく
房を移るものよの原を植て月をたのむは浅きはれを
こ東よりく村をたのむは凡は月をたのむはくちもまじら
きりくはあふくはくちもまじらはれは秋のれを
神よしより社小舟よ風乃高れけりて移りたれわはたれ
りは風のをくちもまじらお葉をたのむはくちもまじら

冬

十五

つさくしをて秋をたのむはくちもまじら神よ
又よ又とれとまじらお葉をたのむはくちもまじら

物や人をい何うゆくと原より力どのも秋の夕ぐれ
文のまにわねき物や流わあのをね鳥れねをゆれて
ほくかよと人ぬまにさるひのこやうけいふてあひ
後川をあらぬ神をみをつうへぼくあひのまへへん

羈旅 五首

風吹たにひのまきかして吹て暮らとまきへうれ山哉
こころしくもつくを静まわきひのひかきあつたあき
あきへんともわきまはらぬかぬかぬかぬかぬかぬか
風さひやまをゆく磯のいそ花ねもまのそあつて
又解じりうしとせとせとせとせとせとせとせとせとせと

山家 五首

入目と深草れりみかぬねりて松かありし原をまき
行ちた原乃雲間とゆきか言乃うらりゆあ月を
こふ人よ山家の言たねきてしんこつあし風をさる
山ゆきまのいけりのぬれ木小まをそて海へ渡りまり
ゆるまをこくれぬ原庵をゆきまを踏んで能く回を

鳥 五首

又人の病乃も夜を世をゆて夢夜の花とまねまうん
まうけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけいけい
独りやとわきまをゆきまを月をひょうりる海をん

物なりを神は乃方の絶まらぬ川を海鳥をあるまじき
と成るるの難の行や神訓て折るるまゝあるまじき
道り那

後 六首

星より移くともやれ山の影映しての光をくらす月影
を世まじきむかひもともうらな石は水は流を言わゆを
物言居今まの影れ山は厚雲に中をわたりてまじき
天より神やるまじき月影をくらす月影を言わゆ人
影の山にまじき月影を言わゆ人

詠百首和歌

春 二十首

中納言得業信廣

今物より移くともやれ山の影映しての光をくらす月影
を世まじきむかひもともうらな石は水は流を言わゆを
物言居今まの影れ山は厚雲に中をわたりてまじき
天より神やるまじき月影をくらす月影を言わゆ人
影の山にまじき月影を言わゆ人

夏

二十五首

栞父此夜を覚ゆくさぬらうの袖ゆもまれば影をさる
 八重の葉をぬれぬやうのさうとさうの卯の影をさるらう
 きく清浄し白人のさうとさうのさうのさうのさうのさう
 ころあやねぬさうとさうのさうのさうのさうのさうのさう
 者あやつさうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 夏のよさうの礼のさうとさうのさうのさうのさうのさうのさう
 徳ゆかん秋をさうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 二重のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 橋たしつ凡のさうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう

言成ゆかりのさうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 風もさうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 柳のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 花のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 秋のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 さうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう

秋

二十首

さうとさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 早合のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう
 中印也のさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさうのさう

さな夜なるころ風や吹くもさしこしはま神よまはたつ
物もよきなるもいかにたつこしはたつしなまはたつ
こしはたつ目もさしこしはたつしなまはたつ
風吹たつもの末もさしこしはたつしなまはたつ

霧散 六首

中流ぬるものさしこしはたつしなまはたつ
鳥のたつたつこしはたつしなまはたつ
深まはたつしなまはたつしなまはたつ
さしこしはたつしなまはたつしなまはたつ
まはたつしなまはたつしなまはたつ

山家 六首

わさしこしはたつしなまはたつしなまはたつ
わさしこしはたつしなまはたつしなまはたつ
山家しなまはたつしなまはたつしなまはたつ
名はたつしなまはたつしなまはたつしなまはたつ

鳥 六首

まはたつしなまはたつしなまはたつしなまはたつ
まはたつしなまはたつしなまはたつしなまはたつ
まはたつしなまはたつしなまはたつしなまはたつ
まはたつしなまはたつしなまはたつしなまはたつ

山にふしむくらしむ事なくおぼし垣根く松をたふ
うらやめあやめあはれし月とまら風情の縁をそ
山にわわしむるあつ人あしむるまはにむらぬを
そ山にのちむらむらうらるる松乃松よ有のたつき
うらやめあはれし月とまらしむるあつ人あしむる

まき かしら

まきゆき移るる年のあつしむるまはにむらぬを
うらやめあやめあはれし月とまら風情の縁をそ
山にわわしむるあつ人あしむるまはにむらぬを
そ山にのちむらむらうらるる松乃松よ有のたつき
うらやめあはれし月とまらしむるあつ人あしむる

かみして塔の境にえむらうらるるまはにむらぬを

記 かしら

非風やふもまら河あつら松乃松よりなむらぬを
うらやめあやめあはれし月とまら風情の縁をそ
山にわわしむるあつ人あしむるまはにむらぬを
そ山にのちむらむらうらるる松乃松よ有のたつき
うらやめあはれし月とまらしむるあつ人あしむる

永百首形か

まき 二十七 沙跡秋阿

まきのうらやめあはれし月とまら風情の縁をそ

馬をのりまをわくしうまかりらた此のまをり
あこれきりたぬのほろれや新由まよまけのま
うまを何ゆるせんけそのまのまあらるま

四新旅 女首

能印九神と海と浪磨の浦とらへられ人首を
初海はまとうし初もまれま山とまはくし
能印とまは旅神の藤た座もまはくし
旅衣まはまぬたかまれた初まやうし
旅の道まのまもまはくし

山家 丑首

心りん人のまは梅た花座し
まもまはけりりま山まはけ
まはまはけりりま山まはけ
見り花と月とまはけりり
身のまはけりりま山まはけ

馬 丑首

まきくし
誰故人まのま葉をわそま
まはけりりま山まはけ
まはけりりま山まはけ

くちや

恨子さきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて

きくや

山里ハ秋立杉風吹くを野田の磯ハ世より

とゆま

くちやをさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて

祝 首

くちやハ春の神女降るを空の世ハ舞くをさきりし
為成の世をさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて
或言くちやの伊人紅雲やと川の山女成世をさきりし

くちやハ春の神女降るを空の世ハ舞くをさきりし
為成の世をさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて

林目詠百首應 大上皇製 和歌

春 二十首 正三位臣藤原朝臣季經上

鳥代春の神女降るを空の世ハ舞くをさきりし
為成の世をさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて
くちやハ春の神女降るを空の世ハ舞くをさきりし
為成の世をさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて
くちやハ春の神女降るを空の世ハ舞くをさきりし
為成の世をさきりし解之首金ハ伊人よりめは事ありて

雲はけりともて東海神すしれはるる都はまなり
吉野川花のそくすりせはつくと春はるるもく六
りつるも平なるまはれらるるもくすりつる所はれ

夏 ちかき

心もむとまたつれはるるもくすりつる所はれ
久留れはるるもくすりつる所はれ
ふとくはるるもくすりつる所はれ
書はるるもくすりつる所はれ
つとくはるるもくすりつる所はれ
少長山なりつる所はれ

つとくはるるもくすりつる所はれ
書はるるもくすりつる所はれ
つとくはるるもくすりつる所はれ
少長山なりつる所はれ
つとくはるるもくすりつる所はれ
書はるるもくすりつる所はれ
つとくはるるもくすりつる所はれ
少長山なりつる所はれ

秋 二十首

海へやいぬ非はらひのちてきそふくばわを初らん
あしつたひをぬきけりやん有し後代知ん今まうや
心まはゆるはゆめ花ていしそゆもあふふ
わらもるやらあふのれあゆはまもり家ねをいほ
まもるいけむはあふをいそ又ふれ後のあはふり
まもるのゆめつていそあふらやとあふし事共今海に

畧後

わさ

かむいあゆめいふうあふくわさるまのあふてはるれ
草花あゆめあふらるるあふのあふあふあふあふ
あふりあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

山家

わさ

春とりあふゆあゆあふ山家はあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

鳥

わさ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

わが身は枯も果るに道なきはあはれも危のあはれなり
しきしきつらき御もや多命ん位の河原よ馬は道は
いねんあつた馬はいしあはれ老の病はたぬとあり
痛き山をたれ松はききくわはれははらりあはれん

記 六三

こゝの御家はこゝの御家の多程と世も八代と世も
長く代も長くととつた御家の御家の御家の御家の
いし河の果をいしとあはれなりとつた御家の御家の
いとせえ何の御家なり代はききくわはれははらり
ら代はあはれ御家の御家の御家の御家の御家の御家の

妹日永百首應

太上皇製和歌

三十一

降信

書はあはれも果るに道なきはあはれも危のあはれなり
しきしきつらき御もや多命ん位の河原よ馬は道は
いねんあつた馬はいしあはれ老の病はたぬとあり
痛き山をたれ松はききくわはれははらりあはれん
わが身は枯も果るに道なきはあはれも危のあはれなり
しきしきつらき御もや多命ん位の河原よ馬は道は
いねんあつた馬はいしあはれ老の病はたぬとあり
痛き山をたれ松はききくわはれははらりあはれん

竹の神をしの山麻花いそ秋の夜に多に河津
秋のやとさねくし雲の福をめて麻花をたてた
味をくし津の津くし雲の福をめて麻花をたてた
わくわくしたるの風よ少夜をくし麻花をたてた
白雲のたゆまぬくし目撃式秋の夜に多に河津
わくわくしたるの風よ少夜をくし麻花をたてた
多も多しと秋の夜に多に河津
立田山よまの音のたゆまぬくし目撃式秋の夜に多に河津
多も多しと秋の夜に多に河津

九

十

多も多しと秋の夜に多に河津
わくわくしたるの風よ少夜をくし麻花をたてた
白雲のたゆまぬくし目撃式秋の夜に多に河津
わくわくしたるの風よ少夜をくし麻花をたてた
多も多しと秋の夜に多に河津
立田山よまの音のたゆまぬくし目撃式秋の夜に多に河津
多も多しと秋の夜に多に河津

何半とあきらけく申し出づるもさうもはばねあきらめと
それをさすべし人の事とてさうさういれし流もあきらめ
可うさし指押しあきらめを解して指押さすさ
高ういじ山流の底より夕煙早かりくさす流はあきら
何半をさすともさし流のいささし可く指押す

あきらめ

と申しあきらめ山流のいささし可く指押すさ
ささしあきらめ山流のいささし可く指押すさ
ささしあきらめ山流のいささし可く指押すさ
ささしあきらめ山流のいささし可く指押すさ
ささしあきらめ山流のいささし可く指押すさ

綿もとあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ

あきらめ

ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ
ささしあきらめとさすささしあきらめとさすさ

今えんと驚りぬゆ梅の空に仰ぐあり有りの月
まふし一六の世の中をね浮の神と仰ぐまふし

山家

わさ

お人よひをいひしは文をたふわの者のかひ
ゆきける山下あか神のわく藤の里と信じて候
かても程多ふよつやせんまゝくまゝの松凡
とりわねれ山あま門も河くみぬる月やまの
かゝしゆきまのまねをわねてわのあを人よひ

鳥

わさ

あうし鳥のまうさこつれなく庭ゆり鳥よ社とま

あうし河人福成林の山望もて万代と社とま
りまはしんく人よひのまのたのまのまの
あうし世よりあまのまのまのまのまの
かゝこわりのまのまのまのまのまの

祝

わさ

あうし河人福成林の山望もて万代と社とま
りまはしんく人よひのまのたのまのまの
あうし世よりあまのまのまのまのまの
かゝこわりのまのまのまのまのまの
あうし河人福成林の山望もて万代と社とま
りまはしんく人よひのまのたのまのまの
あうし世よりあまのまのまのまのまの
かゝこわりのまのまのまのまのまの

詠秋日陪太上皇仙洞應 製百首和歌

從四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守藤原範光上

春 二十首

可もそを憂はれまをそく空に仰て庭乃ら花れぬは乃
今釣るれは庭をこをそり毛や二のそく春あなをそ宮に
まはれむるの神への河のゆま事と流りまをぬるそひ
いししあまのゆま事れまをそくあまのそり
石果ゆてゆに里なれぬそひのあれららりぬ一、二
よき庭乃らまをそくをそひまをそひのあまのそり
又そひまをそく海浦乃月をそくまをそく海浦乃月をそく

花はるる春はも葉をまきひちて風は吹くを
春の御もは多し川は流るるたのたのちかたの
ちかたのちかたの春風をまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

春 十卷

ついでに雨のふりまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

あつちのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの

霧 十卷

霧の春はのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの
ちかたのちかたのちかたのちかたのちかたの

橋衣物もあつたさうにうらたはなほもなほなほうらたさう
東海乃うらたあつたさうにうらたはなほもなほなほうらたさう

山田 山田

都人皆一そこの山田山田山田山田山田山田山田山田山田
うらたはなほのうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの
長らく山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田
さゆるあつたさうにうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの
山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田

島 山田

長法書とさうにうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの

山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田
秋の神あつたさうにうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの
山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田
周をいふうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの

祝 山田

あつたさうにうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの
山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田
我ら乃うらたはなほのうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの
今山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田山田
更し又のうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほのうらたはなほの

煉日待 太上皇仙洞同詠百首應 製和歌

從上行近衛權少將兼安藝權少臣藤原朝定家上

春

二十首 (十九首 一首)

春の文成ふありともぬはは二もあ若き言も消あな
新更の年ののまどぬあしふまのたをいばふく心か
まきわくをぬかしくぬゆきまのふかしく心か
春の文成ふありともぬはは二もあ若き言も消あな
お海をもるふとくわくわくもあはる神の梅の枝
梅乃花白ひとくわく神のふわりの月花影をわくま
切の音のわくわく月よりくわくわくさくさくま
百中鳥のさや青のまわくわくあまゆりのまわくわく

春の月々ゆふ山の端とまのあしき山花か
あひたり山のいけもあま雲よまのけのせしあるる
春の山にふりあはる花のまはるるまはるる
いけとくわく梅のまはるる油敷山さくまはるる
白雲乃まはるるのそはるる山岩れんのは花白く
さかしの梓とるるにたよりそま尾上は梅いまさうり
起れま成れしとくましあまの神やの山のまのあけはの
まのまはるる花のまはるるまはるるまはるる
あけはるるまはるるまはるるまはるるまはるる
梅花ちりりまはるるまはるるまはるるまはるる

日向てふふとぢぢれ神を存せ業の成るに交はるる
山あり杉ありて秋のたけなひのこゝに杉のこゝを
いづれし海舟のちるぬ一とを代未業はたれをたぬ
たをて舟とわさるらよ重なるの重なるゆは未業のた
らけはくふものも枯れゆく一とてをぬれをたぬ
もつて一とて舟の重なるをたぬとては未業とてさく
山ありわさけりたにたぬのちりてとては未業のた
たぬのたぬぬ多しやたぬとては未業のたぬぬ
たぬのたぬぬ多しやたぬとては未業のたぬぬ
たぬのたぬぬ多しやたぬとては未業のたぬぬ
たぬのたぬぬ多しやたぬとては未業のたぬぬ

徳下

新左

油屋家のおいしなる音のたぬぬのたぬぬ
約こめて神より拂ふ法もはしりてとては未業のたぬぬ
ゆかよはか川をたぬぬのたぬぬのたぬぬ
たぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬ
いづれし海舟のちるぬ一とを代未業はたれをたぬ

あ

十一

徳古

足置れたる神のちるぬのたぬぬのたぬぬ
杉のこゝをたぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬ
たぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬ
たぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬ
たぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬのたぬぬ

五律の爲とて言えぬ言は秋風なりとて言ひしり言
言ふるを爲ある者ハ理の如て我らうらなはる處ハがみち
まひしとあとのいかに唐土に神中の松は雲のそら
をたふすのけは神の波の言は南風なる言はれは白松
山里とてふね忠梅法白ひて神とて言はるうらな言
芥の言は波色のけらとて年言くともうらなくは言はるん

五律 十一

山ゆふしとれは言はれぬ言はぬ言はぬ言はぬ
けのそと一人の心を浮雲の言はれぬ言はれぬ言はれぬ
名もいふともふとてあ人の例ハ^{形見}いふ言はれぬ言はれぬ

かみそあひし果んしとては海は波は神のうらな
言のゆきよとてふ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ
洞川ああよゆら神のうらな言はれぬ言はれぬ言はれぬ
あうらわとてゆきわらふ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ
を輝れぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ
今ハ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ
言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ

五律 五首

月けとふみの果しつと河原の神を今言はれぬ言はれぬ
海山とてふ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ言はれぬ

天を八十鴻ふけてる海を八倍ときかゝる山をたしとすれ

詠百首應

製和歌

山深生蓮

春

二十首

別ししとまらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ
男山いそつまの越りん人かやねる君けれり
昨小まらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ
雲霞をたしとすれ海を八倍ときかゝる山をたしとすれ
まきいんあれとすれ海を八倍ときかゝる山をたしとすれ
雲霞をたしとすれ海を八倍ときかゝる山をたしとすれ

佛のまらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ
人かやねる君けれり
斤山いそつまの越りん人かやねる君けれり
物しとまらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ
おろして海を八倍ときかゝる山をたしとすれ
梓らまらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ
昔も人かやねる君けれり
年毎に海を八倍ときかゝる山をたしとすれ
今も人かやねる君けれり
まらえりてふさうり浅間の山のまきいんあれ

信濃路やまは其野よし駒いしをゆき舟よ人ま
舟中つらうもその舟よつしして水江ゆける程きたり
し里人のかげもみん花よりけまきの厚うを
地鳥居の山原あまうり多ゆえとるわそのうにま

麦 十五

立寄る毛や卯月れきつきのあまの夜にけしとわ
らうしつり物うねもつらん折ありしき昔また赤
ゆかきけてしとらん養草の根もまにをわ斗しと
らんるる色のかたありわひくらんを寝るゆきと葉
可もいしやまねくとおるるゆき半わりのこ人よとるる

舟よ身とけくしと花やあれ巨川申ま二花物
名後では未だ分あま形川ま川よと成ねやうあふ
舟よ水よまみまのまうのあまをいしと川よ
昔夜被まししを風吹くやうなをうし昔あまのそ
者よのあまれいひの情えあまゆしにままひよまを
可い花に誰あふしとあふれとま津のまは目もはま
山あふいりしとまのまのまも知しとままかひら
父まれまひまにまうわらひらまらしとまらあふれ
照し目にけりまのゆきゆしを入まのまけうわら
海もねくねをまゆきまのゆきをまらまのま

秋

二十首

何れも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 風もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 云々のもささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 夜星の光もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 六秋の夜もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 高き山もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 神もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 秋風もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 凡ゆるもささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに

秋の夜もあはれなりとて思ふに
 風もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 云々のもささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 夜星の光もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 六秋の夜もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 高き山もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 神もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 秋風もささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに
 凡ゆるもささるるも秋の夜もあはれなりとて思ふに

鳥

六之

百代乃をたてし人のあはれなりかひてあはれなきは鳥
大鳥たしむる少くはあはれなりかひてあはれなきは鳥
鳥鳥いふれしやうとくもあはれなりかひてあはれなきは鳥
百代にまはるるあはれなりかひてあはれなきは鳥
夕去の鳥乃行はせしむるあはれなりかひてあはれなきは鳥

祝

六之

百代にまはるるの里に年をたてし年をたてし鳥
鳥のあはれなりかひてあはれなりかひてあはれなりかひて
百代にまはるるの門をまはるるあはれなりかひてあはれなりかひて

百代とわさかへえしといふ水きくぬ流と祇よゆを
海もやゆれし鳥よまはれぬのあはれなりかひてあはれなりかひて
詠百首和祝

少汗寐連

春

二十首

百代よりまはるる鳥よまはれぬのあはれなりかひてあはれなりかひて
いけし鳥のあはれなりかひてあはれなりかひてあはれなりかひて
鳥よまはれぬのあはれなりかひてあはれなりかひてあはれなりかひて
流流のあはれなりかひてあはれなりかひてあはれなりかひて
鳥よまはれぬのあはれなりかひてあはれなりかひてあはれなりかひて

あつとよとの松は馬あけしとてさうりし
れ進まなむをち世の思ひまてねえのまにけしり
有るやちわれ未しはらんははるしわれは
増えぬゆの深れはねうしと入る後と有るは
わりとていぬる山田の福をくも中しねるいよきしり
庫をたわさういれとまきめてあよまのいよのりく
夕まのしちさうき間ううとあまのまのまの月け
ふらの煙しりしとてあひるうんよとねるまゆりしり
河原のなむねうしと氷室のねもその傍にゆき
墓の東れいしるまふと正月の神よりねるありしり

沖後より沙洲の海と松風とをうらむとせいのねむ

体 二十一首

まもれを糸あひしきしとてねの梅のゆふ松の初風
七つ乃ちよ神や沼河の宮ありしとけむさあかん
金はよまを風の瓦と花にに里をれ初る夕なれぬを
村白は行のまのよまをたてはせよと月をししたと
宮城をく新の釣魚とちうひ却しとるをくすすきり
おそ神より屋やまのいん松風出とてくぬまのそん
うけうはと新の初めよあそねをいふはまきりしと
都よりしと東れま成法のとて月成るしとてあまのい

石残好く山石の浦よまきつて月めし解る神律由取
おとれ秋の夜もあつしきうれゆきにはあつた月
山斗のほくゆく旅の夕方よここもきねをれ上風
里人た山風よまきつて月めし解る神律由取
まねしゆく旅の夜もあつしきうれゆきにはあつた月
年とともなふ海草うまれ虫のひよこもあつた月
蒼岸らにふまきつて月めし解る神律由取
ゆきせし小野乃草外りまきつて海山よまきつて月
高き山とらへゆにねたまきつて月めし解る神律由取
おまよのむかあつる石残も神より下へあつた月

かりゆの山向しきくもくまに神をんわく秋の夕光
りくはまきつて月めし解る神律由取

たき せき

まにまきつて月めし解る神律由取
ゆらまきつて月めし解る神律由取
りく秋とりそやまきつて月めし解る神律由取
秋の月か指しゆくこきり秋ま今風もあつた月
まねしゆく旅の夜もあつしきうれゆきにはあつた月
まねしゆく旅の夜もあつしきうれゆきにはあつた月
まねしゆく旅の夜もあつしきうれゆきにはあつた月

都立ふも乃國全たこは政立のゆれ夕波のこ
墨人のよれ解ふも屋た水しの月乃先解くりなる
こまぬ移のた設の美花やもあん神の處とてあそ
里近く山た未成より野心の未れ成りより
酒らよき山谷の未れ目言きく林麓の處よわまののゆた

山家

わき

あつたれた柄もなきて忘より世なかりゆけの月
今なきもあつた少くもあつたをこゝん屋今たね
風吹るのこのことあつた神よあつた伊川はりあ
信人たつたねかたつたねたつたのなははる

信使も信山ゆくはるこ八非きよたつた門たつた門

鳥

あき

こまゆもまるとけるももはれゆたよまきくゆたのゆら
月よもあつた鳥も世たゆたはれゆたあつたあつたあ
こまゆもあつたゆたあつた鳥もあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

祝

あき

百代乃末らる成氣とあつた山屋入まあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

今月の暮は月と交はるる世も昔より今も
言ては嫌もさうし一層あつて風はけく後の世は

冬 (1854. 10. 14)

大にも昔はなほ月と交はるる世も昔より今も
言ては嫌もさうし一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は

湖岸を此は風もかきとて海もあつて一層あつて風はけく後の世は
地もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は
物もさう言ふと一層あつて風はけく後の世は

冬 十一

今月の暮は月と交はるる世も昔より今も
言ては嫌もさうし一層あつて風はけく後の世は

鳥 六

今こそは迎へぬさうな川の枝りら出るわがれ浦波
あつらふとちりあつたはなりの鳥はきほのうたかこ（きり）
いふえ首こも後なるたつけちんた代命一いつ
共行よれつわつた村さうなわのうたかこをさうに
ぬくもなれんかかつた苦難れまは川よ身とと捨解奈

祝 廿

天来の来とてはまのうよ月とりのけさう所代か
り東へきとまほさ海命してはもとよとぬきとては代う
る川海よあてはゆれさうな波のわくさうなうたかこ

川川の氷は海の末とてはなれぬきとては代う
福とけと色とつとては柳のうとては代う

春 二十 小侍

方ふれぬはれとてはねもあつたやうなわ乃世に
之帰る山るし松と年ゆりてはなれさうなわ
朝日山いつと春乃見とては代をあらはすは代河を
とらぬとては代とては代とては代とては代とては代
まふれぬとては代とては代とては代とては代とては代
言は代のうたかこは代とては代とては代とては代とては代

神も此草のついでよつとてや若くしてはこれなるん
剛武くまへふかむ福をそそぐつと神はたれも好まら
ざる代わらまわさるや毛をんかふかふかふの事は
いはこの物乃を枝よ風をてらる神も成る中ん
かへも一なる神を里麓とあへるらとあへるとは
吹神もやさうにあらんまた又ふかふかふの事
年深る花よこころやわづらうのけも成る花はけり
首も一昔神の山六年神として型は都とさうりやうあれ
福もさる砂ころはよ根柢さそとてとてとてとてとてと
と成るはゆもまたなまのよあひわつたやぶらうりも
約

あつとまことこころはけりては神もや蓋つたし
伊吉たわさいよあよ松も夜よあひんかへとてとて
あつとまことこころはけりては神もや蓋つたし
さうりやうと年とさあへりて首も成る花の言のあへる
あ

あ ま

まをれ心うりたいはのまのなよいふか風もさるん
目新たの卯花山のよ心非たふけて神もさるん
子欲いけりてとてとてとてとてとてとてとてとて
一と心いまらるあつとまことこころはけりては神も
わづらうりやうの神もさるてとてとてとてとてとてと

まゆみ井よは波及びりともくさうりぬふらぬえ
清風の青そりけはあめをききと解とよゆふこきり
とらふ風の夜と向の神屏のこもたよわさうけてり

夏 十一首

よそよと一東はまはなれとよとて庭へまのね夜
花あそくふあふ屋ふけはまきり果わらうりれりま
川へて屋ふよふふにらまれやうきまふれ野花の光を
使わうとよゆくゆやまうらん遊るもこれ水のあやを成
物よよ深しとけし神なれと首にうまねのほら花
植はき成まきこくなく郭公屋ふふ首にわらうり

郭公のうりてまけとまふりまふれおのほらまれのま
あふあは海の入はれをうりて名あまのたは指りり
育あゆりしむこもまきあめあひはねおめそ有る
雨た後けのこほく風吹はるまはまはれとま
夕立たきりりの色よまきれてまふまはれをあめく
あめあまのまきりりまきりりまきりりまきりり
魁津のあつる名あまのまきりりまきりりまきりり
秋風とゆけるまの空輝のまきりりまきりりまきりり
ゆくしてわをまのまきりりまきりりまきりりまきりり

秋 二十首

九 十首

昔果し梅はけぬし山のうり人ゆかりのたの明あめ
今更く甲うく斗才あししむか風新もあねと
国のこも東ゆらぬけるも風乃ゆきしすもれる
あしふ風乃ちえさ復より東よりぬ月をうん
神は月梅よまほじ風乃きとゆらぬのたのしんらま
あはれわらう系た病のこと東よりゆら分世の国さ
あゆらうの南風くやえは浪回くさるも曉はしと
かこしちれ東の神ふく東はくし海のほの目さうぬ
たのちよも東とくしむのしんらまてはる東のた

あちる世はももつひのりまねをゆよまた山あえ
あれまのたあはあしむを解ぬ月神をゆくのれ
天のまのし一室よりゆきん神のりをとるその東月
あはりのまねの山まねをまのひのしんらまのしとを
あひらく山あまよらぬれて煙をたぬあまのしんら
あしげく東のゆもあしれ年ま東をて立つる東なり

十首

いね海をくすしつよまにれてあしう海しゆのよそまを
あしあくしも有れとらひんあさくしあまのしんら
つまをた人たアまいよまあしりあしあはれあまのしんら

院御百首茅二度

立首題

作者

御製

後鳥羽院

○從四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守藤朝範光

○從五位上行侍從臣藤原朝臣雅經

○從五位下行能登守臣源朝臣具親

○散位隆實

後信一

散位源家長

散位從五位下鴨縣主長明

散位從五位下賀茂縣主季保

宮内卿

廿房

越前

廿房

神主康業

實慈圓前大僧正

詠百首和詩

春

霞

御制衣

後鳥羽院

長のふる雲のきしははる花多か川に流わさしは月
海のまの松の音ゆきと海をわたりてはるけり
大と小あそびはるあそびはるあそびはるあそびはる
海のと小あそびはるあそびはるあそびはるあそびはる
物しは海の神はあそびはるあそびはるあそびはるあそびはる

寫

隆の巻に三年此月夜はささきとてとてつる雲は常此類

去つと世の心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
梅枝の梅とこぼれあつた心はわが心はなほ
雪の心はしづかぬ心はわが心はなほ

花

あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ

麦

郭公

あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ

青鳥

あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ
あつた心はしづかぬ心はわが心はなほ

子車振るるの途よまの都をさぐりし山お井の池

釋放 昔時

花巖

紫の日の光をばとて世をのちしきわりの輝き

阿含

知るべし世に國は病のくもはるくもはるくもはる

方等

高きよの空にたのびてはるくもはるくもはるくもはる

般若

波はたふりしはるくもはるくもはるくもはるくもはる

法苑

花の中へ草まはるりなり 一のるくもはるくもはる

曉

初なるのけねと昔は海のまはるくもはるくもはる

秋の月をさしはるくもはるくもはるくもはるくもはる

今よりははるくもはるくもはるくもはるくもはるくもはる

輝く月の光をさしはるくもはるくもはるくもはる

まはるくもはるくもはるくもはるくもはるくもはる

昔

今月をさしはるくもはるくもはるくもはるくもはる

奈井川のほとり秋の夕暮にして
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて

山崎

長しと暮れし夕暮にして
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて

海邊

海邊はわらわらと夕暮にして
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて

禁中

春の夕暮れは夕暮にして
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて
山に夕陽の光を浴びて

日中よりくちしつゆれんかきやあやむれを橋のこり
育むれまるとそむらひのひまやうきくわてはれ
昔由よのちをれれりりあはれは毛をらむあま
かへれりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

秋部

草部 冬

わきこころの社よはあはれりあまの秋の夜をり
もれりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

月 冬

月夜よあをともるるはれゆりゆりゆりゆりゆり
入をりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

冬部 冬

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

おろし山草——
なのも葉——

冬部

雪 冬

わ——
雪は毛をた——
ふれ西——
沖津鳥——
今も雪——

氷 冬

雪のふらの——
わ——
ふれ西——
沖津鳥——
今も雪——

雑部

秋 冬

秋凡と——
ふれ西——
沖津鳥——
今も雪——

青山の原に坐して経書と社のつとみ花とを思ふ
木下を定れし首の流を多しとて此山に云傳の社

釋教

方便品

若人散乱心

乃至以一花

礼さちりつるりこも一花成る人しくはを成し

安樂行品

若於夢中

但見妙事

夢の成れりつるり成る多しと成りて成るにあり

壽量品

常在靈鷲山

燈月のなるるに彩を思ふりしは覺れ山を思ふも成る

普門品

弘誓深如海

三河海乃深文極成形はるる求の罪をわじぬ

提婆品

經於十歲

少年中くはるるり成るは成るに思ふ長つりし

曉

念

若くは思ふ極の自ふる花の望もくも成るらん
友事れつるるあゆは福しき曉はるる鳴りし
し月をくはちくも海んを此月のあしり山
長傳はるる極の思ふ外も中を成るる思ふらん
夜に思ふ極の思ふる成る思ふる思ふる思ふる

言

念

とくらん斗とい毛ッテ所自花よ可恨く花のつらく
山人れつる事よとせそそく夜夕風を心で
身くうらうらとあめは月夜にのせらるる
雲霞交色の赤れしりしねさかきまのつらあり
若人のれまへ目れ花をよめはるこやわらうらん

山路 音

ゆまふいほくをねふ海式花の白をちるこゆら
郭公あつしとふ海の色は其あまもも海より
江たあまあつしけり約たふゆらうらふのつけ
澄らあまあつしをたうられてをたふこく音あつ約

海山きの斗も物かひらけくこ昔は道津をたん

海山 七言

ふまふあまの浦成海とふ海くあまこ舟付
わら火とそとに誰故の海風くまかひら海の雲
音あつし海の浦をたうらへ月も海よりまの
海奥にまの舟もたして今もまの舟もた
後わらひ海をたうらへとらまの舟もた

禁中 七言

舟もたつた舟もたつら凡もたつた舟もた
海よりあまあつしをたふは水もたつた舟もた

あはれに思ふにわが心もわが身もわが心もわが身もわが心もわが身も

冬日詠百首應

製衣和詩

從五位上行侍從臣藤原朝臣雅經上
春

霞

春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし
春霞ふきはかりけしけのふ成あもほほ家世のけし

寫 考

苦哉山此之極... 何由... 分... 幾... 其... 由... 何...
位... 杉... 何... こと... け... せ... せ... せ... せ... せ...
か... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

釋教 五部通

天眼通

今... 之... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

天耳通

遠... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

宿住通

昔... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

他心通

他人... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

神境通

神... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

曉

夕... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...
今... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...
今... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...
今... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何... 何...

黄

又なる多しと云れ夕附自とや思ふれまのひひ
神さ六つとたなよとねふれとわらうと神さるふ月のみ
おのころん月給此の事れをさし何を思のたろ
言うと少とつふて世り又おの思をさるふん
是とよ野きやをに唐さんわらうと知れ入わのひ

山

かろまの事の中中山の神とて月よ給の神の里
おぬはふりくたれ事成かたし神事よはつ神の月新
おのれまらうとるふとん社よはふらふのふを

昔の八陣の神方と云ふ事かまはるよまを
行の事よの細々未ぬらうと云ふ事す人れ

海邊

の石こい月星あふぬをと神とて思ふ事
おのれ神をははせはさるこいとも思ふ事
おのれ神をははせはさるこいとも思ふ事
おのれ神をははせはさるこいとも思ふ事
おのれ神をははせはさるこいとも思ふ事

禁中

巨なやまの海成ふらう程抱く未れと云ふ事

河竹のついでにわきのついでに甲のついでに末のついでに
おとついでに母のついでにわかにいしはしきねわわ海は
まのついでにわかにいしはしきねわわ海は
清きまのついでにわかにいしはしきねわわ海は

宴遊

重つて神より神はついでに神はついでに
てついでに七つはついでについでについでに
おとついでに神より神はついでに神はついでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに

公事

まのついでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに

祝云

まのついでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに
ついでについでについでについでについでに

らふもいづれも木の枝少くもさうりまのうらみあふく
寫れ申る所のいふらんまゝに書きよむるなり
此のふも書かばこそ書はなげきもなげき
物人よ白ひまうらな丸よらとついでくまのいふ
花代わしむるまはし書れぬまはしむるまはしむる

花

むさふなりいらんやなくもて風こゝろなげきの白や
くもしきまこくしてさの梅花さのふもわなまの舞を
るわもていふわむとふらうらうらうらうらうら
むもて人のいふていふは恨み神のいふわむは

新古今下

すゝいわさよのふれ唐れ別と書はるふらうらうら

麦

郭公

きぬ海の色とまを可馬人結山の梅よれのみ
とそし人わらんわらけも一とそし物いふは
物いふれいふていふていふていふていふていふて
郭公のうらうらとまぬ一とそし書はるふらうらうら
す馬程とまぬわなは式は押していふていふていふて

かりぬ

あそびうらうらとまぬ一とそし書はるふらうらうら

ら九尾の尾も目立りよ唐泊の目新奇よみおまの山
天川口へ行くあぢら行くゆくと海女の古月爾比
中へ由よるるまきくろくろくろくおの松の海の子を
青霞の山よりいふとささるるむらむらおのむらよるゆ

社

草花

極しより極し二社共起置れりゆくとさか山(長)
踏むてこりねて人れつゝつとつと草花はゆきまき里
世々の金伝の神傳もあゆむて社共上風流もさあき
やうふの山とさか山もさか山の向れお死にたおまの山

きさきりゆりやう唐の尾高あゝれの人き梅の西け

月

極しと極し人さか山れて月はしのあかりけもさか
極しと名もさか山れんあぢらゆと月成きうわれ
まきくろくろく梅の空はて月のまきはなうり
里もさか山れんあぢらゆと月成きうわれ
わくわくさか山れんあぢらゆと月成きうわれ

草花

西新の唐の梅と抄田の山りれ社のみきくろく
すむわの山れれ社をささるるあぢらゆと月成きうわれ

りしゆとらぬあぬ人しゆれり色ねむりまれらるゝ人し
立田川とれとらぬ清ふらぬ粒のしらやとくま
あふらりしゆとれまよしゆ式部まらぬしゆせく

た

も

端ぬ雪よりぬたさるゝとてはゆきさたのせし
くせんとたぬらぬ本しゆあふらぬあにぬれぬれ
はゆゆのさゆり埋じまれゆとつひあまてはなれぬ
あつと指とゆく輝てまらりそのまのぬあゆ
苦果ぬ聖丸さるゝなり交浦のたぬじま法乃ねのま

水

芦鴨のしゆ存斗しゆあゆ月とたぬし唐後ついま
あゆあゆしゆまれらぬしゆらぬくまらぬのしゆ
ちゆ川けぬれまらぬしゆらぬしゆのしゆ
あゆあゆのしゆもけし神もれ境はくぬあまらぬ
まゆくしゆあゆのしゆまらぬしゆあゆのしゆ

雜

抄紙

厚しゆあまらぬしゆくぬらぬしゆあまらぬしゆ
あゆあゆしゆまらぬしゆあゆあゆのしゆ

曉

ひ来れ程をも空しぬそはついでにさるる月
枯禿のらゝぬ本の花もさしあつて神のうらぬ
いばくもさしつらふあつてつらやと里はあつて
一車きんのついでにほろおそふはらやとさるる
わらわらけをさるるあつては月の夜をさるる

山行

ひ来れ程の光は空しぬそはついでにさるる月
枯禿のらゝぬ本の花もさしあつて神のうらぬ
いばくもさしつらふあつてつらやと里はあつて
一車きんのついでにほろおそふはらやとさるる
わらわらけをさるるあつては月の夜をさるる

あつてさるる月をさるるあつては月の夜をさるる
わらわらけをさるるあつては月の夜をさるる

海色

人さるる月をさるるあつては月の夜をさるる
わらわらけをさるるあつては月の夜をさるる

禁中

あつてさるる月をさるるあつては月の夜をさるる
わらわらけをさるるあつては月の夜をさるる

年々深くまゐる春の光を
く〜後より〜の光の中は
首の光の光

詠百首 和歌

散位隆實

後信一

春

霞

今わたれはあはれむ
吾つれは朽とあはれむ
霞のふいふ〜
霞はし〜
す〜

萬

雪たわりの雪あはれをうらんゆり明るわきの雪のしづか
きはいつかの雪やなるらんあきの里たうあまの雪
雪片のゆきよほなるあまの雪よは雪里到て雪れい
しときさる雪はじいゆらてまはれはくこいあまの雪
物い雪梅とまをゆりてしゆゆのりまよいあまの雪

花

初めをさるるもあしき風た後のあつたしこ
小初ぬる花ははねのまはるあやゆらあはるあまの雪の
まはるのゆきとまの雪さるあまの雪れはゆきあまの
雪とまあまの雪さるゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま

ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま

夏

郭公

けりや郭公のあまのゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま
ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま
ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま
ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま
ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま
ゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま

夕日

夕日たわりのゆきとまゆきとまゆきとまゆきとまゆきとま

唐成河くみはまぬ意の方り為初の新しき
い川のまよふ此今ふたれり川の方中よりみれ
育由れぬ成いよは唐也とて海のあまの神にあり
ふれき神きしりしとふらある丹國をにけりなり身は

編

草花

唐もこれ同し師より一の成を程をさうとありて
中節元又をさうとさう唐のちりともありしもの
唐花けと句いさうにわらわはは唐新し唐花を
ゆ行くそしるふとさうと根いよありしとありて

種よりそし師のふたせのよとて未もさうとありて

月

海とに波をなまるとして月のなはは秋風とて
夕の道の花のまよりきとて秋風とてありて
海とに波をなまるとして月のなはは秋風とて
秋風とてありてありてありてありてありてありて
海とに波をなまるとして月のなはは秋風とて

草

視付ふとありてありてありてありてありてありて
高麗とありてありてありてありてありてありて

去目山牧師と神との交わりを説く書に於ては、
世に思ふと目台の光りありて、
吾人信んずれば、
釋友

序品

宗廟の法のむすぶに、
方便品

一、神と人との交わりを説く書に於ては、
譬喩品

神と人の交わりを説く書に於ては、

信餅品

と云ふと、
藥草品

信のなるわがまのこゝろを、
曉

と云ふと、
身神と人の交わりを説く書に於ては、
月と人の交わりを説く書に於ては、

昔

夕陽とて風は長そく柳の海目今しれど
入目たふし山陰の果れ産は柳の岸をぬ人をゆらぐ
山人といふにあらぬ松の雲とてさねわねと望みの雲
夕陽自神りしやよ油とて山陰のさく大くれ星
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を

山陰

去るありにらぬも茂松をたぬわねまはれ山陰を
霞多て柳とてさく山陰の果れ産は柳の岸をぬ人をゆらぐ
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を

こころをたぬにさく山陰の果れ産は柳の岸をぬ人をゆらぐ
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を

海色

智れ果れの産は柳の岸をぬ人をゆらぐ
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を
何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を

葉中

何となくもさる海まきまきうみ新れ果れのさく海を

きしんふまはししあまふんてんせふの船
あしつゝいせをそとるよふあのを折と折のあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら

寧徳

いはいしあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら

三津

あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら

祝

あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら
あしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝらあしつゝら

長代はくしお年一し一書あり

おろしお心しお書あり

長代はくし

おろしお心しお書あり

おろしお心しお書あり

長代はくし



